

中小企業の“悲劇”



中小企業の苦境が続く。追い詰められた経営者の犯罪も起きた。中小企業が安心して経営できる環境はいつ来るのか。

(株)中小企業総合研究所
主席研究員

坂東 輝夫

環境の厳しさに苦しんでいる。しかし当然ながら、環境の厳しさに苦しむ経営者のほとんどが犯行に走ることなく、堅実な企業経営と健全な日常生活を続けている。したがって、環境の厳しさに罪をなすりつけて、凶行に及んだ経営者を免責する気など毛頭ないのは言うまでもない。とはいえ、犯罪が時代の病を映すのも事実ではないか。この経営者が直面した悲劇は、他の中小企業にとっても決して他人事ではないように思う。



では、この事件から中小企業のどういう現実が浮かび上がってくるのか。この製本業者は6人の従業員を雇い、新聞の折り込み広告や企業のパンフレットを折ったり、製本したりしていたという。経営者に対する近所の評判も「まじめで笑顔を絶やさず、温厚な性格だった」と悪くない。従業員からも慕われていたそうだし、「家族仲も良かった」らしい。職住接近の街中でよく見かける典型的な零細企業のおやじさんに見える。しかも、先代の経営者である実父が脳梗塞で半身不随になり、介護しながらの企業経営だったともいう。これも長寿化社会の現在、それほど珍しいことではないだろう。

ニュースが商品のように日々慌しく“消費”される現在だ。もはや忘れ去られてしまったかも知れないが、3月下旬に東京・文京区の中小製本業の経営者（42歳）が家族の3人を刺殺し、3人にけがを負わせたという事件があった。警察の取り調べに対して、経営者は「おれがやった」と話しているという。

もっとも、これを書いている時点では警察が取り調べ中なので、詳しいことはわからない。だからうかつなことは言えないが、ただ中小企業の経営という点から見る限り、この事件は中小企業（それも東京の）が今、いかに追い詰められているかを象徴的に示しているように思えてならない。報道されている内容から見て、厳しい環境に追い詰められた経営者が止むに止まれず凶行に走ったように考えられるからである。

とはいえ、厳しい環境に直面しているのはこの製本業者だけではあるまい。多くの中小企業も同様に、

堅実に思えるその経営者が、目をそむけたくくなるような犯行に及んだのはなぜか。詳しいことは警察の捜査に待つしかないが、得意先の1社が廃業する



ことになって月収が30万円ほど減ることを、経営者は心配していたという証言がある。別の得意先が都内から埼玉県に移転することになり、従来の契約が続けられなくなったという事情もあった。都内からの工場脱出もよくある話ではないか。

得意先の移転に伴って、製本業者自身が同県に移転する手もあっただろう。事実、この経営者は移転先の下見もしたらしいが、賃料が高くて移転は実現しなかった。都内からの工場脱出といっても、誰もが簡単に出来るとは限らないから、これもあっておかしくない話である。

「仕事が減ってノイローゼになりそうだ」と取引先に悩みを打ち明けていたともいう。確かに、製本業界の苦境は相当なものだ。06年の書籍・雑誌など出版物の市場規模はピーク時の96年に比べて2割も縮小してしまった。得意先の1社や2社が去るという程度の話ではなく、もっと構造的な業界の問題が経営者を襲っていたとも考えられる。従業員に給料や住宅手当のカットも打診していたことも知られているから、なんとか生き残りを図ろうと必死に努力していたのかも知れない。

経営者を追い詰めたらしいもう一つの事情もあったようだ。製本業者の近くに新しくマンションが建つことになったのである。これも、文京区という土地柄や、住民の都心復帰という傾向を考えると、不思議なことではない。しかし、製本業者は1階を作業場にしてきたから、マンションの住民によって騒音の苦情が寄せられるようになり、現在地で操業を

続けるのが難しくなりそう、と心配するようになっていたらしい。近所の人にそうグチをこぼしていたから、これも経営者を追い詰める一因になったと見てもおかしくない。



もちろん、以上は刑事事件としての側面を無視して、中小企業の経営という面からしか見ていない。しかし、本欄の性格上、それで十分ではないか。とはいえ、以上の点だけが犯行の原因かどうかはともかく、東京の中小企業が直面している苦境の多くが、この製本業者に集中的に現れていることがよくわかるのではないか。市場の縮小や高齢者の介護に悩むというのは全国の中小企業に共通してみられる現象だろうが、取引先の転出や近隣マンションの建設による操業継続の困難性などは、東京の中小企業ならではの悩みといえるように思う。

ただ、中小企業が置かれたこういう苦境に同情できるとはいえ、そこから今回の犯罪の残虐性との距離はあまりにも遠い。その距離を縮めるには、やはり警察の捜査を待つしかないし、犯罪心理学の出番があるかも知れない。だから、ここから先は何も言えない。しかし繰り返すが、犯罪は時代の病弊を反映する。この犯罪が東京の中小企業が置かれた苦境の深刻さを映しているとするならば、決して例外の事件とはいえないのではないか。

3月の日銀短観では、やはり中小企業の苦境が際立った。07年度の企業倒産も比較可能な01年度以降最多になったという。中小企業が安心して経営できる環境はいつ来るのだろう。